

## はしがき

公務員には転勤がつきものである，私は介護保険制度施行 1 年前の 1999（平成 11）年 4 月に 10 回目の転勤で，高齢者福祉施策を担っている担当課に配属された。担当する業務は，高齢者福祉基盤整備及び在宅福祉を進めるためのソフト事業も担当していた。中でも特別養護老人ホームの施設整備は，市町村を含め多くの方々が関心を寄せる，予算規模も大きな事業である。以前，学校建設に関わっていた経験から，施設整備が，その後の事業運営に大きな影響を持つと考えていたために，高齢者福祉担当課に配属されて真っ先に行ったのは，高齢者福祉サービスを提供している特別養護老人ホームなどの実態を把握することと関係する文献を読みあさることであった。そんな中で目にとまったのが，角がすり減った黒表紙の一冊の本にあった次のような記述である。

現代社会における一つの基本的な社会的取り決め（social arrangement）は，個人は異なる場所で，異なる参加者たちと，異なる権威に従って，全面的で首尾一貫したプランもないままに，睡眠を取り，遊び，仕事をするのが通例であると，ということである。全制的施設(Total Institution)の中心的特徴は，通常，前記の生活の三領域を区別する隔壁がないことである，と言っている。第一に，生活の全局面が同一の場所で同一の権威に従って送られる。第二に，構成員の日常生活の各局面が同じ扱いを受け，同じ仕事を一緒にするように要求されている多くの他人の面前で進行する。第三に，毎日の活動の全局面が整然と計画され，一つの活動があらかじめ決められた時間に次の活動に移る。つまり，諸活動の順序全体は，上からの明示的な形式的規則体系並びに一団の職員によって押しつけられるのだ。最後に，さまざまな強制される活動は，当該施設の公式目的を果たすように意図的に設計された単一の首尾一貫したプランにまとめ上げられている。（Goffman 1961=1984: 7）

これは，今から 50 年程前の精神病院と刑務所を事例にした収容施設の実態を現したもののだが，特別養護老人ホームとかかわり始めた 1999 年頃に，これと同じような様子を何度も見せつけられ，余りの一致点に驚きを隠せなかった。それから 10 年の歳月を経た今日でも，ここにある施設の姿を容易に思い浮かべさせる現場に出くわすことがある。

今から 10 年程前，高齢者福祉を担当することになって特別養護老人ホームを見て強く感じたのは，「なぜ人生の最後に，このような生活を強いられるのか」という疑問である。折しも，措置制度下から介護保険制度下の施設に転換し，新たな高齢者福祉の姿を描こうとしているまっただなかにあり，多くの特別養護老人ホームを見て歩いている時のことである。多くの施設では，「収容施設」という言葉が示すような，地域から孤立した介護環境の中で高齢者が生活していた。そこには，目を見開き口を開けたままベッドに長い時間横たわっている姿，キャスター付きのベッドに横たわり，裸の上にタオルケット一枚をかけられ廊下で入浴の順番を待っている姿，長い時間ケアワーカーステーションと呼ばれる介護職員の詰め所のテーブルにもたれかかりながら，何かを問いかけたげに介護職員を目で追っている姿，あらかじめ定められた時間にならないと交換してもらえず，汚れたオムツをしたままの姿，子どもに話しかけるような口調や反対に命令口

調で強く激しい言葉でさしずされている姿があった。また、驚くことに、介護職員はこのような介護環境の中で、さしたる疑問を持たず、それどころか使命感を持って一生懸命日課をこなしている「けなげに」とも言い表せるような姿があった。

介護保険制度が始まるとまもなく、さまざまな先駆的事例が報告されるようになった。これらの事例は、認知症高齢者グループホームや特別養護老人ホームの入居者を10人程度にグループ分けし、介護単位と生活単位を同じにしたケア方法を取り入れたユニットケア型特別養護老人ホームなどで顕著に見られた。私は、いつしか、それらの実践の中に飛び込み、職員の一挙手一投足を見ることが出来る距離に立っていた。そのような現場を注意深く観察していると、まだまだ少ない事例ではあるが、どこか見慣れたどこにでもあるありふれた日常の様子が観察されるようになってきた。これまで多くの施設で見てきた、常に小走りで回廊を走り回っていた介護現場とは明らかに異なる、落ち着いた穏やかさのある生活の場を感じるのである。それを見ているうちに、これまで抱えていた「なぜ人生最後に、このような生活を強いられるのか」という疑問が、しだいに薄れて行く感じがしてきた。それと同時に、なぜここには落ち着いた時間の流れがあるのだろうか、なぜ家族や地域の人々が入り出しているのだろうか等々、幾つもの新たな「なぜ」がわき起こってきた。

私は、しだいにそれらの施設からはどうしてあの疑問が感じられないのか、また、そこに介在するであろうさまざまな関係性を知りたくなり、今、その疑問に迫ろうとしてペンを取っている。